

〔論 文〕

ヘーゲルにおける論理学・形而上学・方法論

牧 野 廣 義

はじめに

ヘーゲルは、『大論理学』¹⁾ 第一版(1812年)の「序文」(Vorrede)を次のような言葉で始める。「哲学的思考様式がおよそ25年以来われわれの間でこうむった完全な変革, すなわち精神の自己意識がこの時代に自分を超えて到達したより高い立場は, これまでのところまだ論理学の形態にはほとんど影響を及ぼさなかった」(GW11,5, 上35)。

ここで言われている「完全な変革」や「より高い立場」とは, カントの批判哲学以来展開されたドイツの「哲学革命」である。しかしその哲学革命もまだ論理学の変革には至っていない。この論理学の変革という点にヘーゲルは『大論理学』の第一の課題を設定するのである。

ヘーゲルは続いて言う。「この時期の前に形而上学と呼ばれたものは, いわば根こそぎに一掃され, 学問の列から消滅してしまった」(GW11,5, 上35)。それは, 一方ではカントによる旧形而上学への理論的批判と, 他方では「理論的洞察」は有害で「訓練と実用的な教養」こそが有益だとする近年の教育学と時代の要求による。ここから, 「形而上学をもたない教養ある民族という奇妙な光景」が出現したが, それはあたかも「多彩に飾られながら, 本尊のない寺院のようだ」(GW11,5f, 上36)とヘーゲルは言う。ここには, 形而上学の再建というヘーゲルの問題意識が強く表現されている。これが『大論理学』の第二の課題である。

そして第一の課題と第二の課題は一つになる。すなわち, 「本来の形而上学あるいは純粋な思弁的哲学をなす論理学」(GW11,7, 上38)がなおざりにされてきたのであり, これこそが『大論理学』が探求するべき課題である。ここ

で言う「本来の形而上学」とは, 「形而上学」(Metaphysik)という名称が最初に(編者のアンドロニコスによって)付けられたアリストテレスの著作以来の「形而上学」²⁾である。それは, 「存在としての存在」の研究であり, 「第一の原理や原因を研究する理論的な学問」(982b10)である。アリストテレスはまた「オルガノン」(学問の道具)として, 後に「論理学」と呼ばれる学問を体系化した人でもある。ヘーゲルはこの論理学を形而上学に結びつけて, 両者の変革を行おうとするのである。

しかし, そのためには学問の方法を変革しなければならない。形而上学である論理学をつくりあげる試みにおいて, 「本質的観点は, そもそも学問的取り扱いの新しい概念が重要だということである」(GW11,7, 上38)。その新しい概念とは, 抽象的規定を否定し, かつ否定的なものから肯定的なものを把握する精神の「弁証法」である。このような精神の運動は「認識の絶対的方法」である。しかしヘーゲルにとって, 方法は学問の内容と切り離されたものではない。ヘーゲルにとって方法とは「内容そのものの内在的魂」(GW11,8, 上39)でもある。したがって, 「論理学=形而上学」の内容の体系的展開そのものが同時に「方法」の提示なのである。このような方法の解明が『大論理学』の第三の課題となる。

では, このような「論理学=形而上学=方法論」であるヘーゲル論理学はどのようにして成り立つのか。また今日, ヘーゲルの「論理学=形而上学=方法論」をどのように批判的に継承すべきであろうか。小論ではこの問題を論じた³⁾。

I ヘーゲル論理学の対象としての 「客観的思考」

ヘーゲルは『大論理学』の「序文」において、論理学の対象について、『精神の現象学』との関係にかかわりにおいて、次のように言う。

「私は『精神の現象学』において、このような〔精神が自己自身を構成する〕やり方によって、意識を叙述しようと試みた。意識は具体的対象としての精神である。しかしこの対象の前進運動は、すべての自然的生命と精神的生命の展開と同様に、もっぱら純粋な本質体 (die reine Wesenheit) の本性に基づいている。この純粋な本質体が論理学の内容をなすのである。意識は現象する精神として、その道程においてその直接性と外面的な具体化から解放され、純粋な知識となって、先の純粋な本質体そのものを、それが即自かつ対自的にある仕方で、対象とするのである。この純粋な本質体とは純粋な思想であり、自分の本質を思考する精神である」(GW11,8,上39)。

このように、『精神の現象学』⁴⁾は「意識の経験」と「精神の現象」の叙述をとおして、外面的世界との対立を解消する「絶対知」に到達した。この「絶対知」の対象が、「純粋な本質体」である。それは「すべての自然的生命や精神的生命の展開」の原理である。ヘーゲルはこれを「純粋な思想」であり、「自分の本質を思考する精神」であるととらえる。しかし、自然的生命や精神的生命の展開の原理とされる「純粋な本質体」が、なぜ「純粋な思想」や「自分の本質を思考する精神」なのか。このことの説明はここにはない。この問題についてのヘーゲルの説明をさらに見てみよう。

ヘーゲルは、『大論理学』の「序論」(Einleitung)でも『精神の現象学』と『大論理学』との関係にふれて、「絶対知」が「純粋学」(論理学)の立場であるという主張を繰り返している。ここから次のように言う。

「それゆえ、純粋学は意識との対立からの解放を前提にする。純粋学は、思想が同様に事柄それ自体である限りにおいて、思想を含み、あるいは事柄それ自体が純粋な思想である限りに

において、事柄それ自体を含む。……このような客観的思考が純粋学の内容である」(GW11,21,上50, GW21,34, 上1-34)。

先に自然的生命と精神的生命の展開の原理としての「純粋な本質体」と表現されたものは、ここでは「事柄それ自体」と表現される。そして「事柄それ自体」と合致した「思想」が「純粋な思想」であり、それが「客観的思考」であるとされる。(この「客観的思考」という概念は、『小論理学』⁵⁾(第二版1827年、第三版1830年)の「予備概念」では「客観的思想」(§24)とも言われ、いつそう立ち入った説明がされる。そして「客観性に対する思想の三つの態度」も論じられる。)

以上から、ヘーゲルは言う。「したがって、論理学は純粋理性の体系であり、純粋思想の国であると把握されなければならない。この国は、いかなる覆いもなく即自かつ対自的にあるような、真理そのものである。それゆえ、この内容は、自然と有限精神の創造以前の永遠の本質のうちにあるような、神の叙述であると表現されることができ」(GW11,21,上50, GW21,34, 上1-34)。

この言葉は有名であるが、しかしここで述べられている「創造以前の神の叙述」は、あくまでも表象のレベルの表現にすぎない。ヘーゲル自身が、「以上のことを少なくとも表象のうちに受け入れる」ためには、真理が「手でつかめるようなもの」であるという思いこみを取り除く必要があると言っている(GW11,21,上51, GW21,34, 上1-34)。その点でヘーゲルはプラトンのアイデアのとらえ方を例にあげている。つまり、論理学の内容は手でつかめるような感性的なものではなく、世界の根源的原理となる普遍的なものであり、「純粋な思想」である。論理学の内容として重要なことは、「思考の必然的な諸形式と固有の諸規定とが最高の真理そのものである」(GW11,21,上51, GW21,34, 上1-34)ということである。つまり、論理学の内容となる「純粋な思想」や「客観的思考」とは、思考諸規定の必然的な展開であり、それが世界の「真理」ととらえたものである。

そして、ヘーゲルはこの思考諸規定の意義を次のように説明する。「悟性が、また理性が対

象的世界のうちにあるとか、精神と自然とは普遍的な諸法則をもっており、その諸法則に従ってそれらの生命とそれらの変化が起こると言われる限り、思考諸規定が同様に客観的価値と現存在をもつということが認められるのである」(GW11,22,上51-2, GW21,35,上1-36)。この言葉は、ヘーゲルの言う「客観的思考」の意味を理解するうえで重要である。

つまり、「客観的思考」が意味することは、(1) 精神や自然は思考によって把握される普遍的な諸法則をもつということであり、(2) その諸法則をとらえる思考諸規定が客観的な価値をもつということであり、(3) さらにこの理性が世界のうちに存在し、思考諸規定が現存在をもつということである。ここで、(1) は世界の合法則性を意味し、(2) は思考諸規定の客観性を意味し、(3) は理性や思考が世界の本質として存在するということである。この(3)は客観的観念論の立場を意味する。ヘーゲル自身が強調するのは、「思考諸規定が客観的価値と現存在をもつ」ということであるが、ヘーゲルの言う「客観的思考」には以上のような三つの意味が込められているのである。そしてこのような意味をもつ「客観的思考」の諸規定が、つまり「思考諸規定」としての「カテゴリー」が、ヘーゲル論理学の対象となるのである。

Ⅱ カントのカテゴリー論とヘーゲル論理学

このカテゴリーの考察という意味では、ヘーゲル論理学はカントの批判哲学を継承するものである。ヘーゲルは『大論理学』の中でカント哲学にしばしば言及する理由として、それが「最近の〔ドイツ〕哲学の基礎であり、出発点」であり、またカント哲学が「論理的なものの重要なより規定された側面に立ち入って関わっている」(GW11,31,上67, GW21,46上1-51)ことをあげている。

しかもヘーゲルは、「批判哲学はすでに確かに形而上学を論理学にした」(GW11,22,上51-2, GW21,35,上1-36)と言う。この点はヘーゲルの論理学にとって重要なことである。この言葉は、カントが『純粹理性批判』⁶⁾の中で、

ヴォルフの「一般的形而上学」(存在論)を「超越論的論理学」における「超越論的分析論」に作りかえ、またヴォルフの「特殊的形而上学」(靈魂論, 宇宙論, 神学)を「超越論的弁証論」で徹底的に批判したことに意味する。カントの「超越論的論理学」は、ア・プリオリな認識を可能にするカテゴリーの研究であり、かつ旧形而上学への批判である。ヘーゲルはこのカントのカテゴリー論を批判的に継承しながら、彼の「論理学=形而上学」をつくりあげたのである。そこで、カントのカテゴリー論の要点を見ておきたい。

1. カントのカテゴリー論

カントによれば、われわれの認識は、感性において対象が与えられ、悟性によって対象が思考されることによって成立する。悟性は概念によって判断する能力であり、判断とは「われわれの表象の間を統一する機能」(A69・B94)である。しかも諸表象を主語と述語との関係などとして統一する判断の単なる論理的機能が、同時に、直観の多様が与えられ、それが構想力によって総合された場合、それらに統一を与える機能として働く。すなわち「一つの判断におけるさまざまな表象に統一を与えるのと同じ機能が、また、一つの直観におけるさまざまな表象の単なる総合に統一を与えるのである」(A79・B104f.)。そしてこの機能が「純粹悟性概念」すなわち「カテゴリー」と呼ばれる。

かつてアリストテレスは『カテゴリー論』⁷⁾において、実体(個物としての第一実体と種・類としての第二実体)、量、性質、関係、場所、時、位置、状態、能動、受動という10個のカテゴリーを論じた。しかしカントは、判断の論理的機能の諸形式を示す「判断表」に従って、体系的かつ完全にカテゴリーを見いだせると考えて、12個のカテゴリーを導きだした。すなわち、量(単一性、数多性、全体性)、質(実在性、否定性、制限性)、関係(実体と属性、原因と結果、相互作用)、様相(可能性、現実性、必然性)である。

カントによれば、このようなカテゴリーの機能によって、認識の対象が対象として初めて成立する。つまり、感性的直観において確かに現

象としての対象が与えられるが、しかしそれはまだ思考によって限定されず、秩序と統一をもたない単なる多様として、「無限定な対象」にすぎない。それが認識の対象としての対象であるためには、カテゴリーの総合的統一の機能によって、「自我」の「超越論的統覚」の統一の下へもたらされなければならない。そこに初めて十全な意味での対象、客観が成立する。したがって、「可能的経験一般のア・プリオリな条件が、同時に経験の対象を可能にする条件」なのであり、「カテゴリーは現象に対して客観一般を思考する根本概念であり、したがってア・プリオリに客観的妥当性をもつ」(A111)。このように、認識の主観的条件によって認識の対象が成立するのであるから、そこに「認識と対象の一致」としての「真理性」が、しかも個々の経験的な法則認識が実験・観察的事実と一致するという「経験的真理性」のレベルではなく、むしろその真理性とその普遍的・必然的妥当性を保障する「超越論的真理性」(A146・B185)が可能となるのである。しかし、感性和悟性という認識の主観的条件を一切捨象して、それ自体として見られた物、すなわち「物自体」は不可知である。

さらにまた、「カテゴリーは、現象に、したがってあらゆる現象の総括としての自然（質料的に見られた自然）にア・プリオリに法則を規定する概念」(B163)なのであるから、「自然（単に自然一般として見られた自然）は、その必然的な合法則性（形式的に見られた自然）の根源的根拠として、このカテゴリーに依存する」(B165)。すなわち、カテゴリーは自然一般を可能にするのである。

しかしまたカントによれば、カテゴリーは感性的直観において与えられる現象にのみ適用されるべきであり、すなわちカテゴリーの「経験的使用」のみが許容されるべきであって、経験の限界を超えた物自体に適用されてはならない。すなわち「超越論的使用」は許容されない。しかしそれにもかかわらず、理性は、「経験の限界を踏み越えることを命じる」ことろの「超越論的原則」(A296・B352f.)によって、カテゴリーの「超越論的使用」を行って、魂、世界、神という「仮象」をつくりあげる。これが

カント以前の形而上学である。しかしここで理性は、「魂」についての誤謬推理（パラロギスムス）、「世界」についての二律背反（アンチノミー）、神の存在証明の不可能性に陥らざるをえない。ここに理論理性の限界が示される。以上がカントのカテゴリー論の概略である。

2. ヘーゲルによるカントの批判的継承

このようなカントのカテゴリー論をヘーゲル論理学は批判的に継承する。

第一に、カントにおいて、カテゴリーは、経験に先行し、経験の対象とその認識の普遍性と必然性を可能にする条件であった。カテゴリーは「ア・プリオリな総合判断」を可能にする条件として考察された。カテゴリーは認識の主観的条件でありながら、それは現象としての対象とその総括としての「自然一般」を可能にする条件である。これがカントの「超越論的観念論」の立場である。これに対してヘーゲルは、すでに見たように、カテゴリーを思考と事柄とが合致した「客観的思考」の「思考諸規定」としてとらえた。それは、自然的生命や精神的生命の展開の原理として、それらの存立と合法則性を可能にする理性的原則の論理的表現である。これがヘーゲルの「絶対的観念論」の立場である。

第二に、ヘーゲルによれば、「カントの主要思想は、カテゴリーを主観的自我としての自己意識へと取りもどすことを要求することであった」(GW11,31,上66, GW21,46,上1-50)。そのために、カテゴリーを用いた思考は「現象」にのみ限定され、「思考にとって疎遠で外的なものである物自体」(GW11,31,上66, GW21,47,上1-51)を残すことになった。これに対してヘーゲルは、「物自体」という抽象物は「抽象的思考の産物」(GW21,47,上1-51)にすぎないと言う。(GW11,31,上66, GW21,47,上1-51)。また『精神の現象学』が意識と対象との対立から思考諸規定を解放しており、論理学はこのことを前提として、「絶対的思考一般」(GW11,31,上66)を考察するのであり、「即自かつ対自的に論理的なものであり、純粋に理性的なものである思考諸規定」(GW21,35,上1-36)を考察するのである。そしてこのような論理学の一般的立場

からだけではなく、ヘーゲルは『大論理学』の
カテゴリーの叙述の中で（有論では「或るもの」の「それ自体」（an sich）としての「規定」（Bestimmung）と「それに即して」（an ihm）もつ「性状」（Beschaffenheit）との関係として、また本質論では「物自体」（Ding an sich）と「外的反省」との関係などとして）、カントの「物自体」を批判する論点を提起するのである。こうして、ヘーゲルのカテゴリーは現実そのものを把握する概念として主張される。

第三に、カント哲学の関心は、「ア・プリオリな総合判断」を可能にするカテゴリーの役割の解明に向けられ、つまり「思考規定のいわゆる超越論的なもの」に向けられた。そのため、「思考諸規定そのもの論究は空虚なものに終わった」。すなわち「思考諸規定の対立するものへの規定や、その思考諸規定の相互の相関は考察の対象にされなかった」（GW21,48上—51B52）。そこで、カントでは立ち入って考察されなかった、「量」と「質」等のカテゴリー間の対立や相互の相関関係を把握し、カテゴリーの体系をとらえることが、ヘーゲル論理学の課題になるのである。

第四は、カントの「仮象」への批判の論理学としての「弁証論」（Dialektik）から、ヘーゲルの「真理」の把握のための「弁証法」（Dialektik）への転換である。ヘーゲルは、「弁証法を理性の必然的な働きとして叙述すること」によって「弁証法をより高く位置づけたこと」、この側面が「カントの功績の最大のものである」（GW11,26,上58, GW21,40,上—42）と言う。とりわけヘーゲルは、カントのアンチノミーを高く評価する。そしてヘーゲルは「弁証法」を「絶対的方法」の契機として積極的に位置づける。ヘーゲルはまた、カントが理論的な解決は不可能だと考えた、世界の「有限と無限」、「単一と合成」、「自由と必然性」等のアンチノミーを『大論理学』のカテゴリー展開の中で分析し、その解決を論じるのである⁸⁾。

Ⅲ ヘーゲルの「論理学＝形而上学＝方法論」

以上のように、カントが「形而上学を論理学

にした」とすれば、ヘーゲルはそれを継承しながらも、同時に「論理学を形而上学にする」のである。カントは、論理学はアリストテレス以来一歩も後退することもなく、前進することもなかったと言った（B VIII）。それに対してヘーゲルは、そうであればなおさら、時代の精神が獲得した「その思考と純粋な本質体についての高い意識」に基づいて、論理学を「全面的に改作こと」が必要であると言う（GW11,18,上52, GW21,35,上—36）。これがヘーゲルの課題となる。

ヘーゲルは論理学の体系を「客観的論理学」と「主観的論理学」とに区分するのであるが、ヘーゲルによれば、「客観的論理学」は、部分的にはカントの「超越論的論理学」に対応するものである（GW11,31,上66, GW21,46,上—50）。また「客観的論理学」は、「[思想によってのみ築きあげられるべき、世界についての学問的構築物である、]旧形而上学に取って代わる」（GW11,32,上68, GW21,48,上—53）ものである。それは、かつての「存在論」に取って代わるとともに、「特殊形而上学」をも自分のうちに含んでいる。しかしヘーゲルは、カントの批判によって崩壊させられた旧形而上学をそのまま復活させるのではない。

旧形而上学は、「魂、世界、神」という表象から取ってこられた基体に思考諸規定を適用したのにすぎない。「論理学はこれらの思考諸形式を魂、世界、神という基体から[つまり表象の主語から]自由にして、思考諸形式の本性と価値を即自かつ対目的に考察する。旧形而上学は、このような考察を怠り、そのために思考諸形式を批判なしに使用したという正当な非難を受けた」（GW11,32,上68, GW21,48,上—53）。ヘーゲルはカントによる旧形而上学への批判をこのように評価する。それに対して、ヘーゲルの思考諸規定の考察は、個々の思考諸規定（カテゴリー）の意味と矛盾を徹底して解明するとともに、その矛盾を解決する高次のカテゴリーを導き出すものである。したがって、「客観的論理学は、思考諸形式の真の批判である」（GW11,32,上68, GW21,48,上—53）とされる。

またヘーゲルの「主観的論理学」は、アリストテレス以来の形式論理学で論じられた「概

念、判断、推理」の改作し、それらを「実体」を超えた「主体」の形而上学に改作する。それは、カントが『実践理性批判』や『判断力批判』で考察した「実践」や「生命」の論理をも含む「主体」の論理の解明である。ヘーゲルの表現では、「主観的論理学」は、「自由な自立的な、[自分の中で自分を規定する] 主体的なもの、あるいはむしろ主体そのものである本質の論理」(GW11,32,上68,GW21,48,上1-53)である。

こうして、ヘーゲル論理学においては、「世界についての学問的構築物」としての思考諸規定の体系（客観的論理学）と、「主体そのもの」の論理体系（主観的論理学）とが、形而上学として展開されるのである。

そして、「論理学＝形而上学」の体系は「方法論」でもある。論理学の「内容」の学問的展開そのものが「方法」を提示する。この論理学の方法について、ヘーゲルはすでにニュルンベルクのギムナジウムでの「哲学的エンチュクロペディー上級クラス」(1808年)⁹⁾の第一部「論理学」の冒頭 (§12) で、「論理的なものには三側面がある」として、「1. 抽象的あるいは悟性的側面、2. 弁証法的あるいは否定的理性的側面、3. 思弁的あるいは肯定的理性的側面」(S.11f.) を述べていた。この説明は、『小論理学』でも引き継がれる。しかしヘーゲルは『大論理学』ではこのような番号付けはしない。『大論理学』第一版の「序文」では次のように述べられる。「悟性は規定し、これらの規定を固執する。理性は、悟性の諸規定を無へと解消するものであるから、否定的かつ弁証法的であり、また普遍的なものを産出し、特殊的なものをそのもとに包摂するものであるから、肯定的である」(GW11,7,上38)。ここでも、方法が、「悟性」、「否定的弁証法的理性」、「肯定的理性」という三契機にまとめているが、同時にヘーゲルは第一のものと第三のものとを媒介する「弁証法的契機」を重視する。これがヘーゲルの方法の中心である。したがって、ヘーゲルの方法は端的に「弁証法」とも言われるのである。

カントの「弁証論」は、理性が陥る矛盾の必然性を明らかにした。その功績をヘーゲルは評価する。しかしそれは理性の否定的側面にすぎ

ない。それに対して、理性が否定的なものから肯定的なものへと転換するところに、ヘーゲルの方法の核心がある。「対立したもののの中に統一を把握することにおいて、あるいは否定的なものの中に肯定的なものを把握することにおいて、思弁的なものが成り立つ」(GW11,27,上59)。この点は、『大論理学』第二版「序文」でも繰り返し述べられ、これこそが、「学問的進展を獲得するために必要な唯一のこと」(GW21,38,上1-39)として強調される。

またヘーゲルは『大論理学』の最終章である「絶対的理念」において、論理学の体系がもつ方法を総括する。ここでは、(1) 始元、(2) 弁証法、(3) 終結という「三肢構造」(Triplizität) が論じられる。同時に、ヘーゲルは「弁証法的契機」の意義を強調して、弁証法的契機における矛盾とその解消は、「否定」と「否定の否定」(肯定) という二側面をもつと言う。それが「概念の運動の転換点」となる。その意味でこの契機が「すべての活動性と生命のおよび精神的な自己運動の最も内的な源泉であり、弁証法的な魂」(GW12,246,下373)である。そこで、「三肢構造」における「弁証法」をさらに「否定」と「否定の否定」との二つの契機に分けると、それは「四肢構造」(Quadruplizität) ととらえることもできる (GW12,247,下374)。ここには、論理的なもの「三側面」や「三肢構造」とは関係なく、「弁証法的契機」の意義を強調するヘーゲルの議論を見ることができる。

またヘーゲルは、このような方法に基づく論理の「前進」は、同時に先行する契機を根拠づけるものとなるから、「後退」でもあると言う。したがって、この方法は「一つの円環」をなす (GW12,251,下381)。また、この方法は、先行するカテゴリーの「分析」に基づくものでありながら、先行するカテゴリーにはない内容をつけ加え豊富化するものであるから、それは「総合」でもある。つまり、この方法は「分析的かつ総合的」である (GW12,246,下373)。こうして、前進かつ後退の方法、および分析的かつ総合的な方法によって体系が構築されるのである。

Ⅳ カントとヘーゲルのカテゴリー体系

次に、ヘーゲルのカテゴリー体系の内容を、カントのカテゴリー体系との相違に注目して検討したい¹⁰⁾。

1. 有論のカテゴリー

まずヘーゲル論理学における「有論」では、「直接的なもの」の規定が、すなわち、他者との固有の関係や構造的な連関なしに、直接的で自立的である諸規定が考察される。この「有論」にはカントの言う「数学的カテゴリー」が、すなわち「量」と「質」とが含まれる。ところで、カントにおいては、まず「量」のカテゴリーである「単一性」・「数多性」・「全体性」がもっぱら外延量としてとらえられる。次に「質」のカテゴリーが、感覚への現前としての「実在性」と、非現前としての「否定性」、およびその間に「度」(Grad)が想定される。しかしこの「度」はカント自身が言うように内包量であり、結局は「量」の一種に還元される。

それに対して、ヘーゲルは、「量」のカテゴリーを「質」の前に論じるのは何ら根拠がなく、「質がその本性上最初のものである」と言う。「なぜなら量とは、すでに否定的になった質だからである」(GW11,41,上68, GW21,67,上1-75)。すなわち「量」とは「質」の捨象によってとらえられるからである。しかもヘーゲルは「質」を直接的な規定性一般(「有」・「定有」・「向自有」として、量的規定とは明確に区別する。またヘーゲルは、カントではカテゴリーとして論じられなかった「無限」と「有限」とを、「質」においても「量」においても論じる。とりわけ「真無限」の論理は、有限と無限とを統一して、有限を乗り越える過程としての無限というヘーゲル独自の提起となっている。

さらに、カントでは「量」と「質」の内部においてのみ三肢構造が論じられた。しかしヘーゲルはカントにおいては、「量」と「質」との関係の論理が欠落しているとして、両者の関係を固有に論じるカテゴリーとして「度量」(Maß)を定立する。この「度量」においては、量的変化が質的規定の固有性を媒介として生じ

る「特定の量」や量的規定の漸次的変化の中で質的規定そのものが変化する「度量の結節点」などが論じられる。

2. 本質論のカテゴリー

次に「本質論」では、カントの言う「力学的カテゴリー」、すなわち「関係」(実体と偶有、原因と結果、相互作用)と「様相」(可能性、現実性、必然性)のカテゴリーが論じられる。しかしヘーゲルは「本質論」でそれらを論じる前に、カントが「反省概念」(Reflexionsbegriff)として、カテゴリーとは区別した諸規定、すなわち「同一性と差異性」、「一致と対立」、「内的なもの」と外的なもの、「質料と形式」をも、やはりカテゴリーとして論じる¹¹⁾。この点でのカントとヘーゲルの相違を見てみよう。

カントは『純粹理性批判』の中で「超越論的分析論」への付録である「反省概念の二義性」において、次のように言う。すなわち、上の四組の「反省概念」ないし「比較概念」は、「それらによって対象が、対象の概念をなすもの(量、実在性)に従って叙述されるのではなく、ただ物の概念に先行する諸表象の比較が、そのあらゆる多様性において叙述される」(A269・B325)。この点で、反省概念はカテゴリーと区別される。例えば、「量」の「全体性」(すべて)か、それとも「数多性」(いくつか)かというカテゴリーの適用にあたっては、それに先だって、対象の間で相互に「同一性」が見られるか、それとも「差異性」が見られるかの比較が必要である。また「質」の「実在性」(肯定)か、それとも「否定性」かというカテゴリーの適用のためには、それに先だって、対象とその性質とが「一致」するか、それとも「対立」するかかの比較が必要である。しかもこのような諸表象による比較にあたっては、「この比較はまず次のような反省(Überlegung)を必要とする。すなわち比較される物の諸表象が属する場所を決定すること、すなわち純粹悟性がそれを思考するのか、それとも感性が現象においてそれを与えるのか、そのいずれであるかを決定することが必要である」(A269・B325)。このような「超越論的反省」を欠くならば、純粹悟性の対象と現象とが混同されることになる。ライ

プニッツが「单子論」など、もっぱら純粹悟性による「世界の知的体系」を建設したのは、このような反省を怠り、「反省概念の二義性」に欺かれたからだ（A269・B325）とカントは言う。

それに対して、ヘーゲルは、まず「反省」（Reflexion）そのものを単なる主観の活動としてではなく、實在の客観的關係そのものも含めた關係作用そのもの、媒介作用そのものを表現するカテゴリーとしてとらえる。「本質の中の成、すなわち反省する運動は、無から無への運動であり、それによって自分自身に戻る運動である」（WG12,250,中18）。このように反省とは媒介の運動そのものであり、他者への関係によってのみ自己が存立するような媒介の運動である。ヘーゲルはこのような反省の諸形態、すなわち「反省諸規定」として「同一性」・「区別」・「矛盾」というカテゴリーを論じるのである。こうしてヘーゲルは、カントが「反省概念」としたのも、「関係」と「様相」のカテゴリーとしたものをもすべて含む二項關係の論理を、根拠論、現象論、現実性論として展開するのである。

以上のように、「有論」においても「本質論」においても、實在の「純粹な本質体」を把握する「客観的思考」としてのカテゴリーが展開される。ヘーゲルにとって、「量」、「質」、「関係」だけが客観的なカテゴリーではなく、「反省概念」も「様相」のカテゴリーも、やはり實在の關係と構造を把握する客観的なカテゴリーである。その意味で、「有論」と「本質論」は「客観的論理学」と呼ばれる。それに対して、次の「概念論」では「真理を実体としてではなく、まさに同様に主体としても把握し、表現する」（GW9,18）ための論理が展開される。これが「主観的（主体的）論理学」である。

3. 概念論のカテゴリー

「概念論」では、「有論」における直接性・自立性と、「本質論」における媒介性・關係性を統一した諸規定が考察される。それは、他のものとの關係の中にあつて自己同一であり、他のものへと關係することによって、むしろ自分自身を展開し発展させる「主体」の論理の考察

である。まず、「主観性」における「概念」、「判断」、「推理」はアリストテレスの「オルガノン」を改作し、かつスピノザらの「実体」の論理を克服する「主体」の論理の展開である。そして「客観性」における「機械的關係」、「化学的關係」、「目的論」は、それらの關係を正当に位置づけることによって、18世紀までに支配的であった「機械論的世界観」を克服する論理の展開である。とりわけ「目的論」は、すでにカントが論じた「外的合目的性」（目的・手段・客観的關係）を労働をモデルとして明確化するものである。

さらに「概念論」における「理念」は、カントの『実践理性批判』や『判断力批判』における「実践」や「生命」の把握を踏まえて、これを乗り越えようとする論理の展開である。ヘーゲルは『小論理学』（第二版、第三版）「予備概念」における「客観性に対する思想の第二の態度」では、カントの『実践理性批判』や『判断力批判』への評価もつけ加えている。これはヘーゲル論理学がカントの『純粹理性批判』への対決にとどまらず、カントの批判哲学全体への対決であることを、改めて示すものである。

カントは、『判断力批判』¹²⁾において、「生命」について次のように述べた。「いかなる人間理性も小さな草の産出でさえ、単なる機械的原因によって理解することを望みえない」（KU353）。これに対して、ヘーゲルは、「カントの叙述そのものに従っても、自然の所産を単に質、量、原因と結果、合成、構成要素等のカテゴリーに従つてのみ認識すべき義務はない」（§58）と言う。また「生きた有機体や芸術美の現前が、感官や直観に対してさえ、すでに理念的なものの現実性を示している」（§55）。したがって、生きた有機体を概念的に把握する「内的合目的性」の論理は、カントのような、単に「反省的判断力に対する統制的概念」（KU295）として、すなわち「そのような合目的的所産の原因について単に判断するための主観的格率」（KU321）として考えられるべきではなく、かえってその論理が妥当し、あるいはむしろその論理によってのみ把握しうる固有の対象に対応する、より高次のカテゴリーとしてとらえるべきだとヘーゲルは主張する。

また、「客観性」における機械的關係や化学的關係から、労働における「外的合目的性」からさらに「生命」における「内的合目的性」への展開において、自然必然性によって「外面的に決定される」という論理がしだいに克服され、自然必然性を踏まえながら「目的」を自由に「自己決定する」という論理が解明される。このような客観的世界とそれに対する主体の重層的な決定構造の解明によって、カントが有機体の理解にかかわって論じた「判断力のアンチノミー」（「機械論」と「目的論」の対立）も積極的に解決されるのである。

V ヘーゲルのカテゴリー体系構成をめぐって

以上のように、伝統的論理学の判断形式にカテゴリー発見の手引きを求めたカントに対して、ヘーゲルは『精神の現象学』を踏まえて、思考によって把握される世界の本質的な構造連関にカテゴリー発見の手がかりを求め、かつ思考諸規定の展開の中からカテゴリーを導出した。ここから、カントに比べてはるかに豊かなヘーゲルのカテゴリー体系が形成された。しかし、同時に、「純粋な思考」によってのみ把握される世界の「純粋な本質体」の叙述としてのカテゴリー論、すなわち形而上学としてのヘーゲル論理学に対しては、批判が多い。ここでは、そのようなヘーゲル論理学批判の古典とも言うべき、アドルフ・トレンドレンブルク『論理学研究』¹³⁾（初版1840年）の批判を検討しておきたい。

トレンドレンブルクのヘーゲル批判の要点は、純粋思考によるカテゴリーの自己運動は不可能であり、直観や表象なしの概念の自己運動は不可能である、という点である。そしてヘーゲル自身が、論理学は何ものも前提にしないと、言いながら、直観や表象を密かに導入している、という点にある（S.36ff.）。

トレンドレンブルクは、例えば「有－無－成」の弁証法をとりあげる。ヘーゲルは「有」を論理学の始元とする。「純粋有」は純粋な抽象であり、絶対的に否定的なものであり、その点では「無」であるとして、ヘーゲルは「有」

から「無」を導き出す。しかし、「純粋有」があるだけでは、その無規定性は言いえない。むしろ「無は、ここでは思考の純粋有が直観の充実した有と比較される限りにおいてのみ得られる」（S.45）。さらに、「有」と「無」とから「成」が導き出される場合も、「有」と「無」とはそれぞれ「静止」を表現するだけであるから、それら自身の中には「成」という「運動」は何ら含まれていない。したがって、「もしも運動の表象が先行しなければ、成は決して有と無とからは生成しえない」（S.38）。このように、トレンドレンブルクは、ヘーゲルの言う「純粋思考」に対して直観や表象を端的に対置している。つまり、「純粋思考」は純粋に思考のみを意味し、そこには直観や表象の内容は含まれないと考える。

これに対して、クーノー・フィッシャーは、「純粋思考は、先行する世界秩序（自然のおよび精神的な世界秩序）を止揚された契機として含み、それゆえその本性上、事物の本質によって充実されている」¹⁴⁾と主張する。トレンドレンブルクはこれにも反対して、「純粋思考」とは一切の内容が捨象されて生み出されたものであり、それゆえ「空虚な思考」である。これが「事物の本質によって充実されている」と称することは「内在的な矛盾」（S.124）であると反論する。しかし、この点では、トレンドレンブルクの反論は、ヘーゲルやクーノー・フィッシャーの議論に即した批判にはなっていないと思われる。というのは、ヘーゲル自身が論理学は『精神の現象学』を前提にしていると言い、『小論理学』「予備概念」においても、対象についての直観や表象は、その内容が「思想」に変えられる（§22）と言うように、直観や表象は「思想」に変えられた限りで、しかもカテゴリーとして把握された限りで、「純粋思考」の契機として含まれるからである。したがって、「有－無－成」の例において、ヘーゲルにより即して言えば、純粋有の無規定性に対置されるのは、「直観の充実した有」よりは、「定有」等のより具体的な思考諸規定であろう。また「成」はその直観や表象としてではなく、「成」の思考規定として問題になるのである。

しかしトレンドレンブルクの批判をめぐると

題はそれだけで解決しないことも確かである。なぜなら、カテゴリーの展開は直観や表象の内容を契機として含む純粹思考によって行われえりとしても、はたしてそれが「概念の自己展開」として可能なのかという問題がある。つまり、低次のカテゴリーの「分析」そのものから、同時により高次のカテゴリーが必然的に、しかも拡張的認識という意味で「総合的」に導出可能なのかという問題である。例えば先の「有—無—成」において、「有」や「無」をいくら分析しても、「成」は決して導出できないであろう。なぜなら、トレンドレンブルクも言うように、有と無との「静止」からは、それを超える「運動」の論理である「成」は導き出せないからである。むしろ、そこでヘーゲルが実際に行っていることは、「成」を分析して、「有」と「無」という契機を取り出した上で、実際の叙述では「有」の分析から「無」へ、そしてその統一としての「成」へと論理を進めるのであるが、そこには飛躍がある。

論理学の体系全体においても、ヘーゲルが実際に行っていることは、世界の普遍的な構造連関を把握するさまざまなカテゴリーを取り出し、それを相互に比較して、カテゴリー間の関係をとらえ、その諸規定のより単純なものからより複雑なものへと、かつ対立したものからその総合へという仕方で、カテゴリーの序列をつくり、全体を体系だてることである。このことは、ヘーゲルがある低次のカテゴリーからより高次のカテゴリーを洞察するのは「われわれにとって」(für uns)であるという言葉、すなわち「絶対理念」までを見通しているヘーゲルにとってであるという言葉にも示されている。しかし、『大論理学』では「われわれにとって」という言葉は多くは使われない。それは、より低次のカテゴリーを分析して、より高次のカテゴリーを導き出す手づつきが重視されるからである。それは、より低次のカテゴリーが含む矛盾や欠陥を分析して、そこから得られる論理的手がかりによって、その矛盾を解決するより高次のカテゴリーへの飛躍を示すことである。これはまさにヘーゲルが「弁証法」の重要な側面であると言う、「否定」の中に「肯定」を見いだす方法である。

もちろん、低次のカテゴリーから高次のカテゴリーへの移行には論理的な飛躍がある。また、ヘーゲル自身の説明は「概念の自己運動」として、その飛躍があたかも必然的であるかのように説明しようとするため、難解である。そのために、カテゴリー間の移行はしばしば「こじつけ」であると批判される。しかしそれは、低次のカテゴリーとその矛盾の分析からより高次のものへと、段階をおって行われる飛躍であり、カテゴリー展開には欠かせないものである。この飛躍はむしろ「創発」(emergence)¹⁵⁾として、積極的に位置づけるべきものであると思われる。「創発」とは、低次のレベルのもの活動からその矛盾や欠陥を克服するより高次のレベルのものが産出されることである。

以上のように、ヘーゲル論理学は「客観的思考」を対象とすることによって、カテゴリー体系を構成し、従来にはない「論理学＝形而上学＝方法論」を提唱した。では、われわれは、それをどう評価し、どのように批判的に継承すべきであろうか¹⁶⁾。

ここでの基本点は、「客観的思考」の理解に関わると思われる。ヘーゲルが「客観的思考」という概念において意味することは、先に見たように、(1)世界の合法則性、(2)思考諸規定が世界の合法則性を把握しようという、思考諸規定の客観性、(3)理性や思考が世界の本質として存在するという客観的観念論、である。われわれは、現実世界の客観的で合理的な把握を行う立場からは、(3)の意味を承認することはできなくても、(1)や(2)の意味は承認できるであろう。もしも、思考の学問において、(1)や(2)の意味を否定するならば、それは抽象的な思考や主観的な思考のとらえ方になってしまう。われわれがヘーゲルから継承すべきは、(1)と(2)の意味での「客観的思考」の概念であり、それを対象とする論理学であろう。

「形而上学」については、その言葉は、アリストテレスが「存在としての存在」の考察だけではなく「神の学」でもあったり、カントが厳しく批判した「旧形而上学」であったり、ヘーゲル自身の「形而上学」が客観的観念論の意味をもつなど、問題の多い概念である。その

意味では、先の(1)と(2)の意味での「客観的思考」を対象とする論理学は、「存在論」としての論理学と言ってもよいであろう。それは「存在」がもつ論理の研究であるとともに、「存在」を研究するための弁証法的「方法」の考察である。ヘーゲルから継承すべきものは、そのような「存在論」と「方法論」としての論理学であろう。しかし、ヘーゲル論理学の批判的継承のためには、そのカテゴリー体系の詳細な検討が必要である。それは今後の課題としたい。

注

- 1) テキストは G.W.F.Hegel, Wissenschaft der Logik, Gesammelte Werke, Bd.11,12 und 21, Felix Meiner Verlag を用いる。引用では、この大全集の Philosophische Bibliothek 版 (Felix Meiner Verlag) に従ってドイツ語の綴りは現代のものに変え、大全集の略号 GW の後に巻数 (有論第一版は WG11, 本質論と概念論は WG12, 有論第二版は WG21) とページを記す。有論の第一版と第二版の叙述が同じ場合は、双方のページ数を記す。基本的に同じ内容でありながら第二版で追加された部分は引用文中で [] で示す。第一版と第二版とで叙述が異なる場合はそのどちらかの巻数とページ数を記す。また引用文中の [] 内は引用者の補足である。
邦訳は武市健人訳『大論理学』全3巻4冊 (有論は第二版)、岩波書店、および寺沢恒信訳『大論理学』全3巻 (有論は第一版)、以文社、を参照した。引用では、原書のページ数の後に、有論第一版は寺沢訳の巻 (上) と、他は武市訳の巻 (上一、上二、中、下) とページ数を記す。
- 2) アリストテレス『形而上学』出隆訳、岩波文庫、参照。引用では邦訳に記載のあるベッカー版全集のページ数・左右欄 (a,b) ・行数を記す。
- 3) 私は旧稿「ヘーゲルのカテゴリー論」(日本哲学会編『哲学』第29号、1979年)において、カントのカテゴリー論や反省概念などとの比較においてヘーゲル論理学の性格を論じた。小論は、旧稿で論じたカント論理学とヘーゲル論理学の比較などの部分を用いながら、新たな論点を加えて、ヘーゲル論理学への評価を再検討したものである。
- 4) G.W.F.Hegel, Phänomenologie des Geistes, Gesammelte Werke, Bd.9, Felix Meiner Verlag. 引用では大全集の巻数とページ数を記す。
- 5) 『小論理学』の第一版、第二版、第三版のテキストは次のものである。G.W.F. Hegel, Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften von 1817, 1827 und 1830. Gesammelte Werke, Bd.13,19 und 20. Felix Meiner Verlag. 邦訳は、ヘーゲル『エンチュクロペディー』榎山欽四郎・川原栄峰・塩屋竹男訳、河出書房 (この邦訳は第三版のものであるが、第二版との相違が注記されている)。またヘニング編集の『小論理学』をもとにしたテキストは次のとおりである。G. W. F. Hegel, Werke in zwanzig Bänden Bd.8, Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften im Grundrisse (1830). Erster Teil Die Wissenschaft der Logik. Mit der mündlichen Zusätzen, Suhrkamp Verlag. ヘーゲル『小論理学』上・下、松村一人訳、岩波文庫。引用ではパラグラフ (§) のみを記す。
- 6) Immanuel Kant, Kritik der reinen Vernunft, hrsg. von R.Schmidt, Philosophische Bibliothek, Felix Meiner Verlag. カント『純粹理性批判』高峯一愚訳、河出書房新社。引用では、第一版 (A) と第二版 (B) のページ数を記す。
- 7) アリストテレス「カテゴリー論」山本光男訳、『アリストテレス全集』第1巻、岩波書店、所収、参照。
- 8) Hans Friedrich Fulda, Ontologie nach Kant und Hegel. In: Metaphysik nach Kant? Hrsg. von D. Henrich und R.-P. Horstmann, Klett-Cotta, 1988, フルダ「本来の形而上学としてのヘーゲル論理学」(ハンス・フリードリッヒ・フルダ『カントとヘーゲル—形而上学と弁証法』上妻精監訳、晃洋書房、1994年、所収)において、フルダは、“Metaphysik nach Kant” というヘーゲル学会 (国際ヘーゲル連盟) のテーマは、ヘーゲルの形而上学は「カントの後」のものであるだけでなく、「カントに従った」ものでもあることを示すと解釈する。そしてカントとヘーゲルの双方による旧形而上学への批判とともに、双方の新しい形而上学の意義を論じている。しかし「ヘーゲルの形而上学は存在論ではない」というフルダの解釈は疑問である。
- 9) G.W.F. Hegel, Texte zur Philosophischen Propädeutik. In: Werke in zwanzig Bänden Bd.4, Suhrkamp Verlag. ヘーゲル『哲学入門』武市健人訳、岩波文庫、引用では原書の頁数のみを記す。
- 10) Michael Wladika, Kant in Hegels “Wissenschaft der Logik, Peter Lang, 1995. は、ヘーゲル論理学のすべてのカテゴリーについて、カントとの比較した詳細な研究である。個々のカテゴリーにおける両者の対応関係とその解釈には議論の余地があるとしても、参考になる文献である。

- 11) Taiju Okochi, *Ontologie und Reflexionsbestimmungen. Zur Genealogie der Wesenslogik Hegels*, Königshausen & Neumann, 2008において、大河内大樹氏は、カントの「反省概念」の系譜をライプニッツらにたどり、またカントの「反省概念」をヘーゲルが「本質論理学」でいかに継承したかを詳細に論じている。またドイツでのヘーゲル論理学に関する研究について概括したり注釈している点も参考になる。
- 12) Immanuel Kant, *Kritik der Urteilskraft*, hrsg.von K. Vorländer, Philosophische Bibliothek, Felix Meiner Verlag. カント『判断力批判』篠田英雄訳、岩波文庫。引用では、略号 UK とオリジナル版のページ数を記す。
- 13) Adolf Trendelenburg, *Logische Untersuchung. Dritte Vermehrte Aufgabe*, Leipzig Verlag von S.Hirzei, 1870, Erster Band. 引用では、ページ数のみを記す。なお、トレンデレンブルクについては、藤田健治『現代哲学の系譜』創文社、1961年、参照)
- 14) Kuno Fischer, *Logik und Metaphysik oder Wissenschaftslehre, Lehrbuch der akademischen Vorlesungen*, 1852, §28. 引用は、Trenderenburg, a.a.O.S.122による。
- 15) 「創発」(emergence) という言葉は、フィンドレーが概念論について、「弁証法のこの段階において意識のカテゴリー出現 (ermergence) は理論的に理解でき、まったく正当である」と言った言葉を参考にしている。(cf. J. N. Findlay, *Hegel. A Re-examination*, George Allen & Unwin, 1958, p222.)
- 16) ヘーゲルのカテゴリー体系は、「方法論」としては評価できるが、「形而上学」としては評価でき

ないという批判が少なからずある。例えば、ドイツのヘーゲル研究者のフリードリケ・シックは、ヘーゲル論理学は「思考の諸形式の学問」や「認識論、思考の学問として理解すること」は整合的に考えうるが、「形而上学としての論理学」は妥当な真の意味をもたないと言う。これは、ヘーゲル論理学を思考の学問や方法論として承認し、形而上学としては否定する議論の一つである。ここからシックは、例えばマルクスの「弁証法的唯物論」についても、ヘーゲルの形而上学の精神からの「残滓」(Residuum)を推測する (Friedrike Schidk, *Hegels Wissenschaft der Logik - metaphysische Letztbegründung oder Theorie logischer Formen?*, Verlag Karl Alber, 1994, S.303, S.318)。しかしながら、マルクスはヘーゲルの観念論を批判しながらも、ヘーゲル弁証法の「合理的核心」を現実世界についてのカテゴリー研究に見だし、それを資本主義的生産様式が示す経験的事実と結びつけて「経済学批判」の研究を行ったと言えるであろう。

これに対して、イリス・ハルニシュマッハーは、シックが「形而上学的な究極の根拠づけ」と「論理諸形式の理論」とに分離することに反対して、ヘーゲル論理学から「論理諸形式の形而上学的内実」を論じる。この「形而上学内実」は「実体から主体へ」の論理や、「論理的なものの体系性の社会的内実」、「必然性から自由へ」などの論理において論じられる (Iris Harnischmacher, *Der metaphysische Gehalt der Hegelschen Logik*, Friedrich Frommann Verlag, 2001)。

(2011年11月25日掲載決定)